

日本語教育実践研究（8）

—「日本語音声教育」の実践—

戸田 貴子

日本語教育実践研究（8）は、音声教育実践実習を通じて日本語の発音指導について研究する実践研究科目です。

「発音指導」というと「自分は留学生だが、発音指導ができるだろうか」という疑問を持つ院生も少なくありません。発音は母語からの影響が最も顕著に現れるため、自分自身の発音にいわゆる「外国語なまり」があり、自信がないという場合があります。実習生には常に不安がつきまとうものですが、発音指導に関しては、特にその傾向が強いように見受けられます。

他の技能も同様ですが、日本語母語話者であれば誰でも日本語の発音を教えられるというわけではありません。特に、発音は文字に書き表すことができない特徴を多く含んでおり、日本語母語話者にとっても客観的な分析をするのは困難です。また、方言話者にとって、アクセントの分析が難しいことも知られています。実践研究（8）では、日本人学生、留学生という区別をせず、学生はみな同じ土俵に立つことから始まります。その上で、院生同士が相談して、今学期は日本人学生と留学生のペアで指導を行なうことになり、各自が長所を生かした指導を工夫していました。

早稲田大学別科日本語専修課程では、発音A・B・Cというレベル別クラスにおいて、初級後期終了から超上級に至るまで体系的な発音の授業が行われています。日本語教育実践研究（8）の実習生は、初級後期終了から中級前期の学習者を対象とした発音Aクラスの授業を見学し、グループに分かれて個別指導を行います。今学期は8名で、4グループによる指導が行なわれました。授業時間外においても、授業準備や反省会が行なわれており、実習生全員が実践研究に積極的に参加しました。以前、日本語教育の現場で「学習者の発音が気になっていたが、発音指導のしかたがわからなかったので、方法論を学びたい」という目的意識をもって実践研究に参加する院生も年々増えています。

また、他のレベルの発音の授業にボランティアとして参加する院生もいます。たとえば、修士課程在学中の2年間、毎学期（計4学期）発音の授業に参加したという修了生もいます。2006年度から契約講師として別科日本語専修課程の発音クラスを担当することになったその修了生が留学生であることを、冒頭に挙げたような不安を持つ院生のために付け加えておきたいと思います。

本実践研究のシラバスはホームページ (<http://www.f.waseda.jp/toda/>) に掲載されていますので、ご参照ください。

（トダ タカコ・日本語教育研究科助教授）